

## CURES Salon

## モーツァルト・フィーバーについて思う

後藤 則行

1991年のクラシック音楽界は、没後200年を記念してモーツァルト一色に染まった。音響各社は次々と特集や全集を企画・発売し、音楽会はまさにモーツァルトのオンパレードであった。それは単にクラシック音楽愛好家に止まらず日本中、いや世界中の人々の間に1つのフィーバーを巻き起こしたとも言える。例えば、昨年12月29日付朝日新聞に掲載された同年における同新聞記事データベースのキーワードによる検索件数の結果を見ると、文化人・タレントの項目ではモーツァルトが308件と断然のトップで2位の貫花田の73件を大きく凌いでいる。1991年はドヴォルザーク生誕150年、プロコフィエフ生誕100年に当たる年でもあったのだが、全くと言ってよいほど陰に隠れてしまった。流行は時代を反映すると言われる。モーツァルトがこれほどもてはやされたのも由なしではないであろう。祭りの饗宴が終わり、私自身の個人的感想を述べてみたい。

日本人は長らくベートーヴェンを愛してきた。そして、恐らく現在でもそうであろう。理由はわからないが、年末の第9演奏会は恒例となっている。戦後の荒廃から立ち直り、苦難を乗り越え高度経済成長を達成した歩みは、まさにベートーヴェンの世界である。その音楽は、忍耐と努力の後には必ずや歓喜が訪れることを我々に信じさせるのに寄与した。また、数年前にはマーラーが流行となった。当面の目標であった経済的豊かさを何とか手に入れたものの、見失っていたものの価値の大きさに気付き、反省の念とともに何となく

虚脱感に襲われた。やみくもに目的として邁進してきた対象が色褪せて見えたとき、人々は自ずと根源的な生と存在の問題に立ち戻り、マーラーの音楽に潜む人生のはかなさ、息苦しいほどの絶望感との葛藤に心を揺さぶられたと言ってもあながち間違いではないだろう。

では、今なぜモーツァルトなのだろうか。私には、人々が抱く自由とそれを支える秩序への憧れの表出のように思われる。1991年における歴史的な一大事件は、ソヴィエト連邦の消滅によって幕を閉じた東西冷戦構造の崩壊である。冷戦体制は恐怖の均衡の上に成り立つ不安定なものであったが、反面1つの秩序を提供し、ある意味ではシステムとしてうまく機能した。実際、冷戦下における武力紛争の犠牲者は他のいかなる時代と比較しても少ない。それが壊れた今、世界は未知の空間のなかに放り出されたような状況にある。東側諸国の歴史は行き過ぎた統制（秩序）は決して存続しえないことを証明した。しかし、解放時の期待に満ち溢れた陶酔から時間がたち、無原則の自由の帰結は単に渾沌でしかないという現実と直面しつつある。西側諸国は勝利の美酒を味わうどころか、湾岸戦争、熾烈化しつつある貿易摩擦に見られる如く、今後の世界の安定に何らかの「新秩序」の形成が緊急に必要なことを実感した。自由と秩序は決して相反するものではなく。補完的なものである。例えば、左側通行という規則が車の往来に自由を与えるのであり、無制限の自由を車に許せば全く不自由な混乱が現わ

れるだけである。我々は、人々の自由を束縛するのではなく、人々の自由を拡大するような秩序を希求しているのである。

このような秩序と自由の理想的な関係をモーツァルトの音楽に聴く、と言ったら誇張だろうか。モーツァルトの音楽は作り出されたというより、(神によって)産み出されたという印象を我々に与える。彼の作曲技法は、当時の伝統的な様式を大きく逸脱することはない。しかし、産み出される音楽は束縛から完全に解放されている。いや、秩序こそが自由な音楽の飛翔を可能にしている。ソナタにしてもフーガにしてもある意味では極めて不自由な規則の中で、それぞれの音符はモチーフからフレーズへ、そしてメロディーへと統合され、さらにそれら是对位法などのより複雑な構造によって有機的に結び付いている。しかし、奏でられる音楽は何と自然な、そして永遠の躍動感と自由に満ちていることだろう。各音符はそれぞれ生命感を持っており、一音たりとも無意味なものはなく、また余計なものもない。そこには、ベートーヴェンの

ような意図された悲劇性や決定論的な押し付けがましきはない。また、先達のバッハやハイドンの音楽に感じられる多分の窮屈さとも一線を画している。モーツァルトの音楽にはきわめて自然な、見事にバランスの取れた自由と秩序の調和が感じられるのである。

世界は今、経済のボーダーレス化によるグローバルな統合化と新たなナショナリズムの高揚や貿易不均衡による地域的分極化という一見相反するような大きなうねりの中、一歩間違えば暗い渾沌に陥りかねない状況に直面している。21世紀に向けて、各個人の自由な活動と能力の発露を最大限許容し、各国間、各地域間の相互理解とバランスのとれた競争および協調を可能にするような新しい「世界秩序」の模索、構築がつとに望まれている。1991年という没後200年を迎えてのモーツァルト・フィーバーは、一つの歴史のターニング・ポイントを象徴する出来事のように思われてならない。

(金沢大学経済学部助教授)

## NEWS

### 「環日本海国際学術交流協会・金沢大学懇談会」開かれる

#### —— 立命館大学・北東アジア研究会が訪れて ——

1月24日、立命館大学・北東アジア研究会(代表 大内穂教授)の大内教授ほか6名が本学を訪れ、環日本海国際学術交流協会(代表 山村勝郎金沢大学名誉教授)の藤田暁男教授ほか10名と懇談会をもった。会では、北東アジア経済交流における日本の政治的・経済的役割、および経済優先の限界等について話し合わせ、環日本海(北東アジア)の経済・政治・文化の交流がアジアで果たす役割と課題について意欲的な討論が行われた。このような懇談会は今回がはじめてであったが、双方の今後の研究に有益な成果があったと思われる。また、一行は石川県庁、北陸経済連合会、石川県貿易協同組合などで、環日本海交流の現状をヒアリングしており、それらの情報を参考に、環日本海交流についてさらに研究を進める予定である。